

物語話型の「三年」と「井筒」

西村 聡

「人待つ女」というのは夫の帰りを三年待つ妻のことである。三年に満たないのでは、そう呼ばれる資格がないらしい。思い出されるのは、『源平盛衰記』に描く清経の妻である。清経の都落ちから入水までは、ほかの『平家物語』諸本によれば、三か月ほどであった。それを三年に引き延ばしたのは、約束の音信を待ち、心変わりを見極めるのに、人待つ女の物語としては、三年を要するという判断が働いたのであろう。〈鈍太郎〉の妻たちが、「三年の留守を待ち兼ねて」、新しい夫を持ったと言えるのも、資格を得たうえのことである。

室町時代の語り物には、「三年になるはほどもなし」という慣用句があり、振り返ればなるほど矢のごとく過ぎ去る時間には違いない。しかしその三年を、たとえば清経は西海を転戦し、逃げ場を失い、入水へと追い詰められてゆく。流離する貴種、待たせる夫にとつては、苦悩の連続する、濃密な時間であった。そういえば、三年待たせて妻を亡くした金色太子（「毘沙門の本地」）も、転生した天

大玉姫との再会を果たすのに、めざす黄金の井筒まで、「三年して行く道」を、いったい何本走破したであろう。行動する「人待つ男」は、繰り返される三年の試練、――第三者には絶望的に思える時間、を克服した。

男は三年までなら、女を待たせることができた。三年後には帰ってくる。それを過ぎたら、死んだと思つて、後世を弔つてほしい。金色太子も舞の〈景清〉でも、女にそう言い残している。三年が過ぎて、天大玉姫は弔ううちに嘆き死にをし、清経の妻は形見の髪を夫に送り返した。愛想を尽かして、別の男と関係を持つことも、三年を待った女には許された。鈍太郎の妻たちが、外聞を憚らず、新しい夫を持ったと言ひ張れるのも、そのためである。

三年の後の新枕、我に限らぬ事なれ共、相撲草も取どりに、引けばや靡く習ひ也。

これは〈百合若大臣〉の御台所が横恋慕されたとき、乳母が時間稼ぎに書いた、偽りの返書のなかの言葉である。引けば

靡くのが習い、その習いに抗して、待ち続けた御台所は、大臣との再会をかなえた。『師門物語』の浄瑠璃御前の場合は、やはり侍女の計らいで、言い寄る二条中將を、三年の精進中を理由にかわし、師門のあとを追う。こちらは中將の方が、三年後の新枕を待つ身である。

これらの作品の源流には、  
あらたまの年の三年を待ちわびてた  
だ今宵こそ新枕すれ

の歌を第一首とする、『伊勢物語』二十四段があり、誰にも容易に連想される。これはしかし、横恋慕の新枕を拒み、前夫との再会にこぎつけた妻たちと違つて、懇ろな求婚を受け入れる日に、男が帰ってきたという悲劇の物語である。前夫の帰宅がなければ、引けば靡く習いに、この女も加わったことになる。前夫は身を引いて立ち去った。あとを追う女は、追いつけずに、清水のほとりで空しくなる。この女を、中世の『伊勢物語』注釈では、紀有常の娘と理解する。『伊勢物語』本文にはたんに男・女としか呼ばない登場人物に、在原業平とか紀有常の娘とかいう具体的な名前を当てることは、当時のむしろ常識的な読み方であり、現に〈井筒〉のクセにも、井筒の物語（二十三段）を語つて、「筒井筒の女」が紀有常の娘の異名であるとしている。井筒の恋が実つた後、男は忍び妻を持ち、高安の里へ通う。夜道を案じる女の心が通じて、

男は浮気を止め、女との暮らしに戻る。待つかいあって繕いを戻したのだから、後場8段のサシに引く、「年に稀なる人も待ちけり」の歌（十七段）の「われ」（『五音』所引〈葛ノ袴〉に「此歌ノ主ヲバ、人待ツ女ト書キタリシヲ、紀ノアリツネガムスメト、アラワス」とある）と同じく、これも「人待ちえたる女」（『和歌歌頭集』）の意味で、人待つ女と称されてよい。

こうしてともに紀有常の娘に付会される、十七段と二十三段の女主人公は、どれぐらいの時間、人待つ女であったのか。十七段は地の文に「年ごろ」、歌に「年に稀」とあって定かでない、二十三段には全く言及がない。十七段はこの段によって紀有常の娘を人待つ女と言ひ習わしてきたのだから、物語話型の伝統に照らすなら、「年ごろ」は三年以上と想像されるが、そもそも状況説明の簡略過ぎるこの段は、登場する二人がたとえば男の友人どうしであっても物語は成り立ち、人待つ女の三年という話型に分類するのは、本来は無理なはずである。あくまで中世的な理解のかぎり、待つ側を紀有常の娘とし、人待つ女の称を与えたことになる。

二十三段にしても、舞の〈伏見常葉〉では、常葉の偽りの身の上話のなかでこ

の段を引き、業平も自分の夫も、愛人のもとへ通ったのは三年であったとしていて、話型にはめ込むことで偽りの「物語」が安定し、聞き手に信じられ易くなるのである。『伊勢物語』の行文をたどったのでは、送り出す女の内心を男が疑うまでに三年もかかったとは読めない。また男は女の家から通うのであって、女が帰宅を待つのではない。離れていたのは、男の身より心の方である。それを歌の力によって、女が取り戻した物語が、二十三段である。

紀有常の娘は若い日に男の求婚の言葉を待ち、中頃は男の浮気が止むのを待った。男の心が振り返るのを何度も待つのは、男が在原業平である以上、紀有常の娘の宿命と言える。そのつど女は、男を「待ちえた」が、三年で解決がつく男の性根ではない。待たせる男の相手をして、人待つ女も習い性となり、死後にも昔男を慕っている。シテのそういう本質を一言で言い表す呼称が、〈井筒〉にとつての「人待つ女」であり、その称の由来する十七段が必要とされたのである。

それに比べると、二十四段の「三年を待ちわび」た悲劇は、やはり異質な感じがする。思いが男に届かず、女は無念の死を遂げた。待ちえた女の喜びと、この女の感情とは、一曲に両立しがたい。こ

の女はこの女で、妄執物のシテに使えばよい。男の返歌の一部、「真弓槻弓年を経て」が〈井筒〉に引用されたのは、この女も紀有常の娘と理解されていた縁からには違いないが、二十四段の物語自体は、投影させることでシテの性格が分断されるのを、世阿弥は注意深く避けている。

〈井筒〉のシテは、待ちえた思い出に執着する。思い出しては、男の形見を身にまとい、水鏡して陶醉する。それが「人待つ女」の世阿弥なりに定義した姿であり、生前からの習性は亡霊の今も失せず、成仏できない直接の原因であり続けている。そういう時間も、三年の区切り、悲劇の結末は分断する。『花鏡』の言葉をまねて言えば、「物語」には終わりがあり、〈井筒〉の能には果てがない。

物語話型の三年を、世阿弥はむしろ積極的に利用した。人待つ女が三年過ぎたのを恨み死ぬ〈砧〉、三年待った夫が死に、子にも修行の三年を待たされる〈柏崎〉、三年がかりの母子の再会は〈桜川〉も同じく、〈昔刈〉の別離も三年間であった。これらの作品には成仏や再会という、めでたい終わりが用意されている。逆に〈松風〉や〈錦木〉の三年は、輝く青春の思い出であり、追慕して亡霊は永劫を経る。〈井筒〉の女も永劫に待つのは過去の時間である。（金沢大学助教授）